トマス・アクィナス著 SUMMA CONTRA GENTILES の 現代的解釈（4）

Bonazzi Andrea

サピエンチア英知大学論叢
第39号　2005年（平成17年）2月発行　抜刷

第25章
神はいかなる類のうちにもないこと

227.

また，このことから必然的に神はいかなる類の中にもないということが結論づけられる。

228.

確かに何らかの類の中にあるものはすべて，その自らのうちに，それによって種に向けて類の本質が規定される何かを持っている。というのは，類の中にあるものはどのようなものでも，その類の何らかの種においてもあるからである。(17) しかしながら，そのことはすでに示されたように〔第一巻24章〕，神において不可能である。したがって，神は何らかの類の中にあるということは不可能である。

229.

さらに，もし神が類の中にあるならば，付帯性の類の中にあるか，あるいは，実体の類の中にあるかのどちらかである。だが，神は付帯性の類の中にない。なぜなら，付帯性は第一存在者や第一原因であることはできないからである。またさらに，神は実体の類の中にもない。というのは，類としての実体は，存在そのものではないからである。そうでなければ，すべての実体は自らの存在となり，他のものによって引き起こされることがなくなるだろうからである。このことは，すでに上述されたことから明らかなように〔第一巻13章〕，不可能である。だが，

iv　訳注。ナチ時代のドイツ軍兵のベルトの上には Gott mit uns と刻まれてあった。
(17)　例えば，「肉うどん」は「めん類」の中の「うどん種」に属してる。

神は存在そのものである。したがって，神はどんな類のうちにもないのである。[18]

230.

同じく，類の中にあるすべてのものは，存在性の見地からして，同じ類の中にある他のものと異なっている。さもなければ，類は多くのものについて述語されなくなるだろう。[19] さて，同じ類の中にあるすべてのものは，その類の何性に一致しなければならない。というのは，類は，その中のすべてのものについて，「ソレハ何デアルカトイウ点」(in quod quid est) において，述語されるからである。したがって，類の中にあるすべてのものの存在性は，類の何性の外にあることになる。[20] しかしながら，このことは神において不可能である。それゆえに，神は類の中にないのである。

231.

さらに，各々のものは，類の何性の特質によって配置されている。なぜならば，類は「何デアルカ」(quid est) という点において述語されているからである。だが，神の何性は自らの存在そのものである〔第一巻22章〕。しかし存在という見地からして，いかなるものも類の中に配置されることはない。[21] なぜなら，さもなければ，存在者が類ということになり，それが存在そのものを意味表示することになってしまうからである。[22] したがって，神は類の中にないということになる。

232.

存在者が類でありえないということは，哲学者（アリストテレス）〔『形而上学』，II，998b22-27〕によって，次の仕方で証明されている。もし存在者が類であるならば，その類が種へと限定されるように何らかの種差を見出さなければならない。さて，いかなる種差も，類が種差の概念の中にあるような仕方で，類に参与することはない。というのは，さもなければ，類は種の定義において二重に措定されることになるからである。[23] だからそうではなくて，種差は，類

(18) 大学に通う田中太郎君は「大学生」として分類される。ところが，同時に太郎君は「田中家の子孫」でもある。その存在性は「大学生」ということに尽きるわけではない。

(19) 「肉うどん」と「焼きそば」と「スパゲッティ」は，それぞれ異なる存在者である。けれども，共通点として，これらについて「めん類」であると述語される。

(20) 「めん類」は，「小麦粉・蕎麦（そば）粉などを水でこねて伸ばしたものを，細長く切った食品」(広辞苑) であるとすれば，「肉うどん」が存在し始めるために肝心である肉はめん類の定義に入っていないのである。

(21) 「猫は何であるか」と，「(今台所で) 猫が存在するか」との違いを考えて見よう。地球上に存在する (乃至，した) すべての猫の共通点は，「存在する」ということではなくて (そうであれば犬にも共通してしまうし，亡くなった猫は猫でなくなる)，「猫性」である。

(22) 「存在者の類」を想定すると自ずから「非存在者の類」を想定してしまい，前者の本性 (共通点) は「存在すること」になってしまう。

(23) 「強力粉（きょうりきこ）」は「めん類」の定義に入っていれば，「うどん」という存在者を定義づける際，「強力粉」と言う項目が二回出てきてしまうのである。

c）それゆえに，実体の定義は，「基体ヲモタナイトイウ事柄ガ適合スルモノデアル」[26]，という仕方で理解しなければならない。さらに，存在者という名称は存在から付されているように，事物の名称はその何性から付されているのである。このようにして，実体の概念とは，他のもののうちにない存在が適合する何性を持つものと理解されるのである。しかしながら，神はこれに適合しない。なぜならば，神はそれ自ら存在以外のいかなる何性をも持たないからである〔第一巻22章〕。そのことからいかなる仕方においても，神は実体の類のうちにないということが結論づけられる。したがってまた，神はいかなる付帯性の類のうちにもないということが示されている以上，このようにして神はいかなる類のうちにもないということになる。

種と類の関係について，また現代的な進化論との関連について Armand Maurer, *Darwin, Thomists, and Secondary Causality* ***Review of Metaphysics*** MARCH 2004 VOL. LVII, No. 3　ISSUE No. 227

第26章

神は万物の形相的存在ではないこと

237.

さらにこのことから，神は各々の事物の形相的存在以外の何ものでもないと述べた人々の誤謬は反駁される[27]。

238.

確かにこの形相的存在は実体的存在と付帯的存在とに分けられる。しかしながら，神的存在は

(26) 「付帯性」は存在するためには何らかの「基体」を必要している。「実体」とは「付帯性」以外のものであり，従って「基体」を必要としないものである。これは，抽象的な理解である。直観的に理解してもらうために，「ダイヤル電話」と「プッシュ・フォーン」を考えていただきたい。「ダイヤル」や「ボタン」にばかり注目すると，全くことなるものに見える。しかし，ダイヤルやボタンが付帯性であり，実体は電話という機械である。ダイヤルはダイヤルとして存在するためには，電話という「基体」をもたなければならない。ダイヤルというものを理解するために，やはり「電話機」ということにさかのぼらなければならい。電話はむしろ独立とした存在であり，その意味で「基体」を持たないものである。

(27) ここで，AMARICUS de Bene（† 1206）とその弟子たち（Amariciani）のことであると思われる。彼らの説が "Pantheismus formalis"（形相的汎神論）と言われ，1210年に異端とされた。万物は同じ形相を持っているから，結果的に「二次的原因」(causae secundae) が否定される。神によって創造された物事は神から直接に流出し，自立した存在をもたない。C. PERA, op. cit., p.288; C. MICHON, op. cit., p.386参照。なお，「二次的原因」の形而上学的意義および「進化論」との関係について，A. MAURER, Darwin, Thomists, and Secondary Causality. In: "The Review of Metaphysics" 57 (march 2004) 491-514参照。

の概念において理解されるものの外になければならない。ところで，存在者と述語されるものは，存在ということによって理解されるものの中にあるのだから，存在者によって理解されるものの他に，いかなるものもありえないのである。それゆえに，存在者はいかなる種差によっても制限されないのである。したがって，存在者は類ではない。このことから必然的に神は類の中にないということが結論づけられる。

233.

このことからまた，神は定義づけることができないということが明白である。なぜなら，定義はすべて類と種差からなるからである。

234.

その上，神については，結果によるもの以外[24]論証することはできないということが明らかである。なぜなら，論証の原理とは，まさにその論証されるものの定義であるからである。

235.

しかし，ある人にとって次のことが正しいように思われるかもしれない。つまり，神が付帯性の基体でないということから，たとえ「実体」という名称が固有に神に適合できないとしても，それにもかかわらず，その名称によって示される事柄は神に適合し，神は実体の類のうちにあるのである。なぜなら，実体は自らによって存在するものであり，そしてこのことが，すでに示されているように〔第一巻23章〕神も付帯性でないことから，神に適合することは明らかである。

236.

a）しかしこの反論に対しては，すでに述べられていることから，「それ自らによる存在者」は実体の定義の中に入らないということを主張しなければならない。なぜなら，「存在者」であると述べられていることは，類でありえないからである。それというのは，すでに証明されたことから，存在者は類の本性を持っていないからである。

b）同様に，「それ自らによる」と述べられていることから，類でありえないのである。なぜならば，「それ自らによる」とは，否定以外の何ものも意味しないと思われるからである。すなわち，それは純粋な否定である。その否定もまた類の概念を構成することができない。というのは，もし構成するならば，類は事物が何であるということではなく，何でないということを述べることになるからである[25]。

---

(24)　第一巻第12章［8］参照。

(25)　レストランで，「麺類でないものを下さい」と注文したら，何を指しているかは定かではない。